

# PHD LETTER

## 55

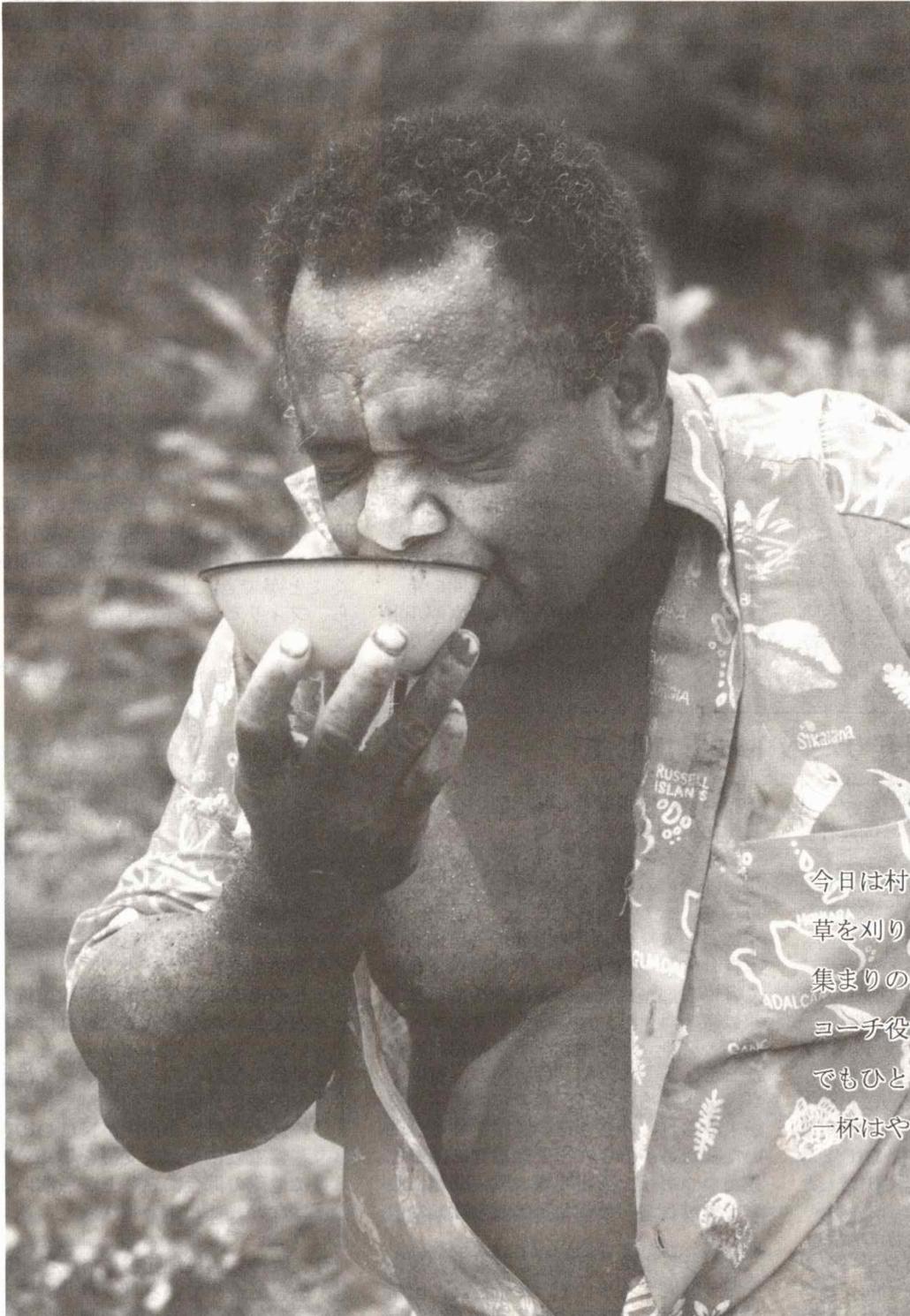
PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1995・6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- タイツアーレポート ..... 3 P
- 連続セミナー報告 ..... 6 P

発行: 財団法人PHD協会  
 編集人: 草地 賢一  
 住所: 〒650 神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202  
 TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867  
 郵便振替: 01110-6-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会  
 定 価: 100円



今日は村の若者の共同作業日  
 草を刈り、野菜畑を手入れする  
 集まりの悪い若者に  
 コーチ役のおじさんは渋い顔  
 でもひと仕事あとのヤングナ※の  
 一杯はやっぱり格別。

※この植物の根を水に溶かして飲む。一見、泥水。フィジーの男衆には欠かせない。

フィジー、ビチレヴ島タイレブ村

### 草の根の人々を訪ねて

フィリピンのふたつの村での人選

今年は雨が遅くて困ってんだよ、とネグロス、オリンガオの村人が言う。私たちが訪ねている間、1日のうちどこかで雨が降り、雷が鳴っていた。聞けば例年より雨季が2ヵ月遅いという。雨が降りはじめ農作業が忙しくなったところだった。ひとりの治安上の緊張感はありません。落ち着きを感じた。

PHD協会は、フィリピンでは三つの地域の人々とおつきあいがある。そのひとつネグロス島では、ネグロス西州の南にある町カバンカランから約12km内陸へ入ったオリンガオに拠点をおくKKRISMA(クリスマス)というグループの人々とやりとりを続けてきた。89年にドミナドル君、90年にネストール君、91年にジャネットさん、加えて短期生としてヘススさんを同年に招いてきた。

クリスマス自体は、93年6月に設立の新しいグループであるが、そのメンバーの多くがそれ以前、KASAMA(カサマ)という別の組織に属しており、その時からの関係である。現在32人のメンバーとその家族を含め、約100人で構成されている。代表にわがドミナドル君、副代表ヘススさん、監査にネストール君と、PHDの研修生が大きな役割を果たしている。

会の目的は、オリンガオ周辺の農民のつながりを強く協働すること、そのために政府や民間団体と協力すること、これまでとは違った農業のための訓練や学習会への参加を通じて、生産の向上を図ることにある。具体的には現在、みみずを使った堆肥づくりの拡大とMASHIPAG(マ

シバグ)といわれる伝統的な品種を見直す稲作をすすめている。

4人の招へいに加えて、これまでに数回の日本からの訪問、またルソン島ヌエバエシーハ州ガバルドンの農民との交流を支援することで、クリスマスの応援をしてきた。今回は5年ぶりの5人目の研修生の可能性を話し合うための訪問であったが、活動を見学し、また話し合う中から、今しばらくは内部活動の強化を優先



今後の協力について話し合う  
左からヘスス、ネストール、ドミナドルさん

させ、日本に人を送るのは97年度以降とすることで意見の一致をみた。日本での研修という提案に対し、冷静な判断で対応できるクリスマスに信頼感を強めることができた。

ネストール君は細君の3人目の出産を控えソワソワ、ドミー君は仕事が恋人のよう。ジャネットさんは今回はマニラに出ていて村では会うことができなかったが、結婚し一児の母になったと聞いた。

ネグロスの後、先にも触れたガバルドンへ。ネグロスからの招へいの先送りを受けて、ここから96年度の研修生の選考

を目的に訪れる。93年に短期生ヨリー(オリンピア)さんをこの地域から迎えたが、1年の本格的な研修生は初めて。ここはマニラに本部のあるSAFRUDI(サフルディ)の地方活動拠点であり、90年から毎年春にPHDの研修生が、研修の最後に比較研修として訪ねているところである。ここ数年のつきあいから、ネグロスとはまた違った問題がここにはあり、とくに近年では、農薬、化学肥料の多用が村の人々の健康にも害を及ぼしていることがわかってきた。GBP(新しい希望への導きの意味)と呼ばれるグループがサフルディの支援のもと、村に組織され、農村地帯であるガバルドンで活動を展開している。手工芸、女性、青年、農業の4つの部門で構成され、今回は特に農業部門に属する村人と話し合い、28才の農業者ミノ・トレドさんを96年春招くことで合意に達した。併せて日本での研修から1年半が経ち、自信を深めた様子ヨリーさんの働きぶりもみることでできた。

今回は、82~83年の1・2期の研修生の地域、マニラの南、ラグナ州に足を伸ばすことはできなかったが、ひよっとしたら宿を訪ねてくれるかと思い、彼らにも手紙は出しておいた。そうしたら最後の晩に1期生マノリト・ロサーナ君が訪ねてきてくれた。元気そうで、今酷暑に取り組んでいることを熱っぽく話してくれた。13年を経た研修生のがんばりを聞くことができるととても嬉しく思いながら、フィリピンを後にした。

主任主事 藤野達也

サミット全体の印象は紙数の都合で十分まとめられませんが強く感じたのは、

- ・地球レベルの問題は政府間だけでは討議できない。何といてもNGOとのパートナーシップが必要で、欧米、アフリカなどではかなり具体的に実現している(今回日本政府は3人のNGO代表を政府の公式代表団に加えた)。
- ・そのためにNGO自体が政策提言能力をしっかりと養成しなければならない。
- ・世界のNGOのネットワークは地球の問題に具体的に何かができる。そのために日本の市民がNGOの存在基盤確立に早急に支援を集め、本当に地球の保全に立ち上がらなければならない。

今、阪神大震災地元NGO救援連絡会議で急ぎ進めている「サハラシン震災支援」活動の中で、改めてこのことを実感しています。

草地賢一

## 第11回タイフォローアップ&スタディツアー報告

震災のため報告が遅れていた年末年始に行ったスタディツアー。16人の参加をえて第11回目となりました。

日程 94年12月23日~95年1月2日・10泊11日  
コース 大阪~チェンマイ~ボックオ村~ムシキー村~チェンマイ~カラシン~サイナワン~バンコク~大阪

久しぶりのサンコムさん



### 北タイ、カレンの村

ムシキー。94年5月から日本での再研修を行ったプリチャーさんが勤める小学校のある村です。ちょうどクリスマスにあたり村のお祝いの会に私たちも加えてもらい、食事と共にしました。

プリチャーさんはこの村の農業改善に取り組んでいます。豚のグループと野菜のグループができています。昨年は小屋だけでしたが、今回は豚が飼われはじめ、今後豚の数を増やしていく予定です。この養豚は自らの食用としてより、現金収入の策として考えているようです。成功すれば他の村にも広めていきたいと意欲的。



豚小屋の前で、グループのメンバーとプリチャーさん(座っている人)

野菜グループは6人で構成され、堆肥や牛のフンを肥料として使っています。自家用には薬なしで作り、外へ売るものには農薬や化学肥料を使っているそうです。健康に悪いのはわかっているけれど、生産物を買付けてもらうには、その規格に合わせるために使わざるを得ないとのこと。この使い分けを無くし、農薬、化学肥料に頼らないものをとの意識は育ってきています。

ムシキーの手前にある村ボックオ。ここでは菊の契約栽培が始まっています。電気が来ているので電照菊も作っており、びっくり。

電気が入り、道路が良くなり便利になってきました。しかし例えば、子どもを町の学校にやったり、町と同じような生活をしようとしたらすると、お金が今まで以上に必要となり、生活のペースが変わってきてしまいます。町との関わりが多くなるのはいいことだけではない、と村人は感じはじめています。

コマさん(5期生)を含めた村の集まりでは、グループ作りで役割についてなど伝えるのに時間をかけないと理解が得られない、また、米国や日本でも有機農業が主流でないことを根拠に、有機農業

に積極的でない農民が多いことも聞きました。それに合わせて日本からの参加者から、日本でも見ただけで野菜を選ぶことがあり、消費者の意識が問われているとの発言も出ました。

ボックオの村の人たちと連携しているパヤップ大学農村開発研究所員のチャラムサクさん(93年度短期)の話でも、有機農業はやる人がその真の意味を理解してやらないと続かない、農薬、化学肥料の功罪を理解するように話をして農村での活動をすすめているということでした。

日本が決して理想的な状況ではないからこそ、同じ立場で考えていきたいと改めて思いました。

### イサーン(東北)

今回はカラシンの町で一泊とサイナワンの村での一泊となりましたが、村では訪ねた地域のリーダーであるバムルンさん(89年度短期)からタイの農村の状況を聞き、特に土地の痩せているイサーンでは、98~99%の人が政府の定める収入目標の下にいて、若い人のみならず仕事の得られる可能性のある人は出稼ぎに行ってしまうといった厳しい現実を知らされました。

今回は、サンコムさん(7期生)に久しぶりに会うことが出来て、大変嬉しく思いました。村にいて仕事をするには、なかなか難しいらしく彼も年に2ヵ月は都会へ働きに出かけているようです。またワラヤさん(6期生)は子どもを抱えながら、先生になる勉強を続け、春に試験を受けると張り切っていました。



ソディ通信

### 〈カレンの人々とソディの私〉

ツアー参加者 米山 美加

ソディに関わって2年間、カレンの人々に対して温めてきた思いや気持ち私と一緒の海を渡りました。今まで手紙のやりとりの中でしか知り得なかった村人の素顔や生活に触れることによって、これからの私自身のソディとの関わり方や生き方に何か影響を与えるだろう、という予感を胸に・・・

カレンの村で強く感じたのは、村人の2つの思いでした。それらは以前から今日まで続いているカレンの伝統と文化から生じてくる相対立する矛盾でした。ひとつは、その昔ながらの生活に幸福を感じ、維持してゆきたいという思い。もうひとつは、その生活を打破し新しいもの、幸福を求めたいという思いでした。今まで、頭ではわかっていたつもりのような村人の思いを実際に肌で感じることは、大きなショックでした。

この悩みや思いをどう解決していったらみんなが幸福になれるんだろう。この村人の悩みは私たち日本にいるソディのメンバーの悩みでもあるのです。村人の健気で率直な努力や頑張りを見ながら、もっと真剣に考えるべき村とソディの関わり、研修生とPHDの関わり、そして途上国と日本人との関わりをかなり他人事として捉えていた自分を感じました。

短期間でしたが、村人と直に接することのできた今回のツアーによって、今まで無責任に下していた判断も、これからは村人の顔や生活を思い浮かべて村人の立場になって考えることができそうです。私たちが遠い日本でこのように暮らしている今も村人と同じ時間を生きていることの不思議さと嬉しさを胸に、出発前の予感にとってかわった思いを確認しています。



### 社会開発サミットに参加して

去る3月5日から12日までデンマークのコペンハーゲンで開かれた「国連社会開発サミット」に出席しました。

はじめ私は地球の発展、社会のありようをどう捉え、政府もNGOもどう今の環境危機や人間のそれを考え、「発展・開発」を次の世代に引き継ぐかを考えるために参加する予定でした。しかし大震災の発生によって、私の参加の内容は一変しました。つまり、このサミットに集まった全世界の人々に、震災の地神戸からの緊急メッセージを送るために出席することになりました。そしてこの費用は「関西NGO協議会」が支援して下さり、被災地のNGO代表として出席したのでした。

日本のNGOの代表団の交渉の結果、正式なアピールは日本NGOフォーラムの場で3月7日にスピーチを1回、続いてもう1度、3月10日の日本政府、NGOとの協議の場において発言の機会を得ました。

特に3月7日のスピーチは、朝日新聞

の特派員の宮川記者の強い関心を得て、日本にも紹介されました。

私はこのスピーチを通して、震災の救援が国内のみならず80数カ国の政府、NGOによってなされたこと、「長田」の中に弱い人々の国際的な連帯(具体的には在日韓国・朝鮮人、ベトナム人と日本人の協力)が実現し、強化されたこと、救援にあたって、NGOやボランティア団体・グループの働きが市民の認知を得たこと、市民参画型、提言型の「復興」が実現されるために、草の根の民主主義が求められていること、援助をする側にいた私たちが、それを受ける側に回って見えつつある、南北問題、環境問題に改めて気付きつつあることなどを話したのでした。

サミットでは「市民による災害の被害をどう軽減するか」という分科会に出席し、南アジアで活躍するインドの防災NGO、長い歴史をもって地道に働いているフィリピンのNGOとの出会いを深めました。

前号でお伝えしきれなかった12期生トンさんとルークさんの日本での研修を報告いたします。農業研修をひと通り終え、これからその整理とまとめに取りかかるところでの地震で、やむを得ず帰国となっていました。二人とも予定より早い帰国に心残りもあったようですが、こちらが期待した研修の大切なところはかなり理解してくれたようです。

### ルークさん (ソロモン)

94年12月～95年2月  
中村庄助宅/家島漁業協同組合(兵庫・家島町)～下郷農業協同組合/下郷小学校(大分・下毛郡/西日本研修旅行)

ルークさんは、環境の違いに戸惑いながらも農業、特に小規模な有機・循環農業に取り組んできました。具体的な技術そのものより、その考え方と経営の方法について、お世話になった農家の方々の例をいろいろ比較しながら学びました。その中で、今後ソロモンにも増えてくるであろう農業・化学肥料を完全に否定するのではなく、効果的に、そして依存してしまわないよう上手に活用しながら、循環農業に取り組んでいきたいと話していました。

帰国後届いた手紙に「私はPHD運動に参加できたことをとても嬉しく思っています。村で開発とは何かということを考える人がいれば、PHDが目指してい

### 94年度短期 ベノ・カメオさん (パプア・ニューギニア)

94年10月に短期研修生として来日したベノ・カメオさん。過去迎えたトニーさん(7期)、ヘルペさん、レルさん(8期)、ラニーさん(9期)の送りだし団体であるルーテル教会開発奉仕部(LDS)の職員です。4人の研修生の研修先を訪ね、研修内容を理解し、彼らの今後の支援に生かすこと、日本のNGOとの意見・情報交換を行うこと、日本の人々と交流を深めることを目的とした2カ月の滞在でした。

来日～NGO大学(神戸市)～渋谷富喜男宅(神戸市西区)～毎日国際ボランティア大学(大阪市)～牛尾武博宅(兵庫・市川町)～ふえろう村塾(兵庫・小野市)～シルバークレッジ・生協大会・毎日新聞(神戸市)～渡辺省悟宅(兵庫・丹南町)～吉村正信宅(兵庫・御津町)～田中五郎宅・波賀町森林組合(兵庫・波賀町)～山崎宮林署・山崎林業事務所(兵庫・山崎町)～パプア・ニューギニアとソロモン諸島の森を守る会・NGO活動推進センター・熱帯林行動ネットワーク・アジア学院・曹洞宗国際ボランティア会・パプア・ニューギニア大使館(東京)～大阪府寝屋川淡水魚試験場(大阪・寝屋川市)～NGO大学(奈良

# 研修生レポート

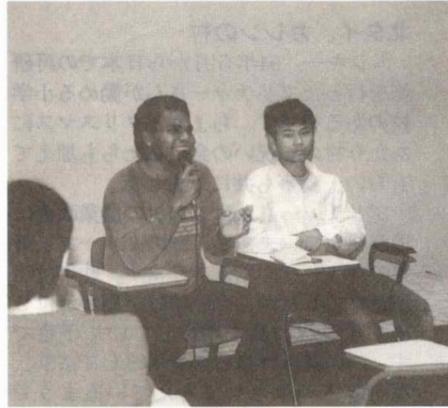
るものを自信をもって伝えたいと思いません」と書いてあり、こちらでも嬉しく思いました。

### トンさん (ビルマ)

94年12月～95年2月  
牛尾武博宅(兵庫・市川町)～下郷農業協同組合/下郷小学校(大分・下毛郡/西日本研修旅行)

来日当初から養鶏を学びたいと課題が絞られていたため、技術的なところでも得るものが多くありました。そもそも彼が養鶏にこだわったのにはふたつの理由がありました。まず、鶏糞を利用することで現在使われている化学肥料の量を減らし、狭い農地の活用を可能にすること、ふたつめは卵で村人のたんぱく質を少しでも補うことです。養鶏は経費を多く必要としない方法、地域にあわせたやり方ができることを、すでに日本で学んだ研修生から聞かされていたようです。

村に帰り、養鶏を行うにあたって課題となるのは、そのエサの調達です。人間の食べるものも十分でないのに……というのが大方の村人の意見。日本のように



帰国前の報告会で、左ルークさん、右トンさん

配合飼料を買ってとは行かないので、田んぼや、川にいる小魚、貝など周囲でまかなえるものを最大限活用していきたいと意欲を見せていました。

「ウィンさん(10期生)の企画力、トゥンティンさん(11期生)の地道な努力、ムームーさん(11期生)の女性としての気遣い、そしてトンさんの庶民性がかみ合えば新しい村づくりのモデルになる」とご指導いただいた方から期待の声も聞こえています。

がれ、アテもなくマチに出る人々、特に若者が増えています。マチに出ても定職につけるわけでもなくブラブラしたあげく、犯罪の増加にもつながっているともいわれています。また現金を必要とする生活が少しずつ村にも浸透してきています。そこには村で生活できるという方向性の提示とそのための具体的な対策が必



毎日国際ボランティア大学で森の話をする/大阪

要になります。村の生活の中の不便さや問題点を克服し、自営そして自給自足を土台にした生活を営んでいくことが基本だと考えます。

- P: 村の人々はその方向をどう考えていますか。
- B: 外の文化、価値観に対する免疫があまりないことや、外からの情報のバランスが不十分なこともあって、例えば極めて安い値段で貴重な森を売ってしまうことがあります。これまで自分たちが森とともに暮らしてきたということを忘れてしまって、周囲の環境や生態系のみならず人の社会をも壊してしまうのです。もっと村の人々の中に気づきが必要です。それとともにこういった環境と人々の問題を知りながら利益だけを求めて経済活動をすすめる企業や人々に反省を求めたいと思います。
- P: 日本にもたくさんの南洋材が輸入されていることは知っていましたか。



有機農業の現場を訪ねた/兵庫・市川町

- B: いくつかの日系企業が操業していることは知っていました。でもそれが何に使われているのかまでは知りませんでした。私たちの森林資源を単に材木としてとらえるのではなく、私たちのみならず地球規模のいのちを支えるものとして考え直してほしいと思います。
- P: PHDの研修についてどう考えますか。
- B: 私たちがすすめ、またPHDも実施している人づくりというものは、すぐに結果が見えてくるものではありません。時間がかかることです。帰った4人の研修生たちも地道に活動しており、これからの期待をしています。今後も日本の皆さんと草の根レベルの情報の交換や交わりを続けていきたいと思っています。PHDの仲間をはじめ日本の中に金儲けのことばかりでなく、社会の、地球の問題を考える人たちがたくさんいることを知ることができて嬉しく思いました。

## 13期生紹介

8月来日予定!



**ビショ・ジョティ・サプコタさん**  
<29才・男性>  
ネパール バグマティ、カブレ  
研修内容 農業

第1期研修生ビスタさん(83年来日)の帰国後の村での活動が生んだグループ、サムス・セワ・サムハの一員です。小学校の先生を経て、現在は農業で生計をたて、4人の子供がいます。



山麓から見おろすビショさんの村



**チル・カエウさん**  
<23才・女性>  
カンボジア タケオ県バティ郡  
研修内容 保健衛生

日本キリスト教海外医療協会(JOCS)ブノンペン事務所の協力を得て選考されました。4人兄弟の上から2番目。大人の識字教室で教えています。落ちついたまじめな印象の女性です。カンボジアからの3人目。



識字教育の教材ポスターを広げるチルさん。左はJOCSワーカーの藤沢さん。

## 国内研修生紹介

### 宮田早夏さん

<23才・女性>

この春に大学を卒業し、将来、海外旅行をもっと国際理解や協力で活用させたいと考える彼女。1年間、PHD協会の業務展開から多くを学ぶ意欲で満々です。こちらも初の試みに期待は大です。



PHD連続セミナー企画者3人が語る

気負わず 気張らずで どお? かしら...

前号でご案内したPHD協会主催の連続セミナー「気負わず 気張らず 国際協力 ～ぼらんていあ・ぼらんていあ～」...

A: 1月17日に起こった阪神大震災をきっかけにボランティアについて考え始めた人たちと共にその意味を問い直し、震災だけに終わってしまわず、これからどのようにボランティアを続けていくかを考える場を提供するためにこのセミナーを開くことにしました。

B: 1回目は『あの震災からボランティアを見つめ直す』、2回目は『普段着のボランティア』、3回目は『世界の中の日本を感じる』、4回目は『アジア・南太平洋から見た日本』というテーマやったね。

A: 1回目には大阪ボランティア協会の名賀亨さんを招いてお話を伺いました。C: 応援する市民の会でボランティアの調整やってはる人やんなあ。

B: そう。名賀さんは、ボランティアするのは「はっと感じる」時や、て言うてはったよ。例えば、階段の下で車椅子に乗った人を見かけた時、かわいそうだからやなく階段を一人では上れないという「社会的制約」と気づいて「はっと感じ」、その人を手伝おうと思う。それがボランティアの始まりというわけ。

A: 「はっと感じる」場は人によって違うので、人それぞれの取り組みがあって当然なんです。

B: 名賀さんの話の後、参加者の誰かが、ボランティアとはやってあげるといふ気持ちでやるのではなく見返りを期待してやるのとも違う。親戚づきあいや近所づきあみみたいに自然にできるのがいって言ってたよね。

A: ほかに、ボランティアというとか特別なことをしているように聞こえるのでその言葉を使いたくないという人や、「ボランティアとはどうあるべきか」を探求し、その答えが見つかるまで行動に移せない人があまりにも多いのではないかと、という意見もでした。

B: そこで2回目は福祉、環境、国際協力の分野でボランティアとして活躍している3人の話を聞いたわけなんですけど、そのきっかけは家の外で何かしたかった、母親の死、1枚のピラなどというように身近なところにあったようやね。

A: 人のためになっただけでも自分を向上

させたい、世の中を少しでもよくしていきたいという根底にある思いは3人とも同じでした。その話を聞き、参加者の皆さんにも身近な所で取り組めることがあることに気づいてもらえたと思います。B: ボランティアをする上での心構えについての話もあったよね?

A: ボランティアには責任がないのではなく、自主的に関わったことだからこそ責任が伴います。その責任を負うためにはボランティアとしての自分が出ることに限界を知っておかなければならないとか、ボランティアの自己満足に終わってしまわないように、相手にも自分にとってもどうするのが一番いいか十分考えて行動するべきだということでした。

B: そやけど、ボランティアを続けるためには楽しくないとあかんでしょ? そうして、仲間が増えたり、視野が広がったりと、自分のプラスになることも出てくるし。

A: 1、2回目はボランティアというものを大きく捉えて話し合いましたが、3回目以降は、その行動の対象のひとつとして私たちの関わっている国際協力の分野に焦点を絞っていくことにしました。B: ということで、3回目は「貿易ゲーム」というのをやって、世界経済のしくみを疑似体験してみたわけですか。

C: みんなけっこう真剣やったなあ。A: そうですね。楽しみながらも何か考えるところがあったと思います。この体験を具体的な事実として理解するために、4回目は大阪YWCAの雀部真理さんと神戸新聞の記者太田貞夫さんをお招きし、肌で感じた世界と日本との関係をお話していただきました。

B: 雀部さんは、南太平洋のフィジーとソロモンとに約3年半滞在して、日本が南太平洋において何をしていた、草の根の人々にどう影響を与えているのかを調査してはったということやけど、特にソロモンの日本との合弁の水産会社の従業員に対する待遇の改善に取り組んでたそうです。

A: 日本は利益のために一方的に相手を利用しているように思うとおっしゃっていました。

B: ソロモンの人たちは、現地で日本からの青年海外協力隊員に会ってかなり親日感があるみたいやけど、一方で日本は、南太平洋の国々は観光地であり、漁業資源、森林資源、そして安い労働力の供給源としてしか映ってないのではないかと、ということやったね。

A: 必ずしも歩んできた道が良かったことばかりとは言えない工業化社会の先輩

として、日本はその経験を失敗も含めて分かち合うことも必要だと話されました。

B: 太田さんには、「食糧他給」という連載記事の取材でタイに行った時のお話をしてもらいました。

A: 私たちの食べているモノの多くは海外から輸入されているわけですが、なかでもタイから多くを輸入しているということです。

B: それにまつわるショッキングな話がいっぱいあったよね。

A: タイ人のそうそうは食べるものがないブラックタイガー(エビ)の養殖のために、マングローブ林が次々と切り開かれ、汚染も広がっているそうです。

B: 現地で生産している日本のあらゆるメーカーで、少しでも焼きたか形が悪いものは日本での規格に合わないということで、生産された半分が捨てられるねんて。

A: それから、日本では規制があって使えない強い農薬をタイへ輸出しているそうです。その農薬を使用して作ったイチゴやトマトを今度は日本が輸入しているというのには驚きました。

C: メイド・イン・タイランドのエビとかあられて店で買えるん?

A: タイ産に限らず、東南アジアで作られたものは店頭と並ぶときに「国籍」が消されてしまうことが多いそうです。日本と海外、特に第三世界の国々との関係は知らない間に見えなくなっているんですね。

B: 気をつけてみると私たちの生活ってソロモンとかタイとかいろんな国に支えられてるんよね。そういった国々を犠牲にしていることかかって多いみたいやし。

A: それがかかったところで5回目、6回目ではさらについでに世界につながる働きが毎日の私たちの暮らしの中にどう見つけられるかを考えていくつもりです。

B: 4回目の後に、PHDのバザーのお手伝いに手を挙げてくれた参加者がいたけど、そんなところからも国際協力につながっていけるんやなあ。

A: きっかけはなんでもいいんです。その参加者のように一歩踏み出せばそのうちボランティアすることの大切さや楽しさが分かってくると思います。

C: なー。

B: なに? ここで終わりたいねんけど。

C: ぼく、ほとんど何も言ってへんねんけどこんなんでもよかったん?

B: 私らの邪魔せんとしてくれてありがとう。

C: きつוף。

PHD NEWS

<会費・ご寄附寄託状況>

Table with 4 columns: Date, Count, Total Amount, Average Amount. Shows data for April and May 1995.

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

<13期生ホスト・ファミリー募集>

8月から迎える2名の研修生をお世話いただく、滞在家庭を募集します。研修生の紹介は5ページをご覧ください。

ご希望の方、興味のある方、ぜひ一度お問い合わせ下さい。

男性1名...8月上旬から1年間 女性1名...8月上旬から96年3月まで

来日直後の約2ヵ月間の日本語研修が終了するまでは毎日、それ以降は研修の合間の滞り時(平均1ヵ月に5日ほど)のお世話をお願いします。

原則として朝食・夕食、宿泊をお願いします。当協会規定額を経費としてお支払いします。

<スタディツアーから新しい生き方を見つめませんか?>

日本での研修を終え、帰国した研修生の村を訪ねる旅。村での生活体験、村の人たちとの交流を通して、私たちの日本の生活を振り返る、国際協力について考える旅にしませんか。

インドネシア・スマトラ 第9回

2月に帰国したばかりの12期生ラッドさんはじめ9名の研修生の待つふたつの村へ。次期研修生の選考も行います。

日程 8/18~29 11泊12日

コース 大阪-シンガポール-バダダー-パルパル-アイルバングス-ブキティンギー-バダダー-シンガポール-大阪

定員 13名 定員になり次第締切り

費用 一般24万円 会員23万円 ※年末にはタイへのツアーも予定しています。

<ソディーからのお知らせ>

昨年12月のスタディツアーで新しい布を仕入れてきています。反物(45cmx300cm)のほかランチョンマット、テーブルセンターに使える小さめから中くらいのものもあります。みなさんの地域や学校の文化祭などで、ぜひカレンの草木染手織布を紹介して下さい。布とあわせてPHDのTシャツ・絵はがきなどの物販やPHDの活動紹介のできる機会を少しでも多くしたいと願っています。

バザーがあればぜひお声をかけて下さい。

<今年も丹波の森で林業体験>

5回目となる「枝打」合宿。今年は3回に分けての開催となります。林業体験で汗をかき、熱帯林問題などの学習会で頭を使う。交流会で仲よしになれば、もうみんな枝打仲間です!

場所 兵庫県丹南町大山区 定員 15名(中学生以上)

Table with 4 columns: Date, Day, Fee, Deadline. Shows dates for July 2nd, 21st, and 11th.

※原則として全回参加ですが部分参加も可

<会員拡大キャンペーン95!/>

予想だにできなかった震災が生活のあちこちに多大な影響を与えています。神戸近辺の会員の方々に被害のため会費をお支払いできない方も多数おられると思います。しかしながらやはりアジア・南太平洋への応援も継続していきたいと願っています。研修生を通して村とつながる応援・交流に1人でも多くの方に加わっていただきたいと思ひます。

今年は、新しいPHDの紹介パンフレットを作りました。会員・協力者の皆様にもぜひ新しいかわり方を見つけていただければと思ひますし、お知り合いにご紹介下さるときにもご利用いただきたく思ひます。さらに必要な方、お知らせ下さい。お送りいたします。



神戸のまちから

地震から5ヵ月以上が過ぎました。状況の変化のテンポもゆっくりしてきました。大急ぎで復旧する必要のあるところは早いペースで進みますが、急を要さないところはまだまだ手つかずです。人々の生活は表面的にはだいぶ落ち着いてきました。しかし住むところや仕事を失った方々の生活はそう簡単に元へは戻りません。地元の人々による取り組みが基本ですが、これからは被災地以外からの継続した支援は必要です。

PHD協会では前号会報でもお伝えしたように、夏に迎える第13期研修生の準備をすすめる一方で、被災地支援の活動も続けています。夏からは研修生がやって来て、被災地支援に充てる時間は少な

〇月×日のPHD協会

職員 草地 震災以降、地元NGO救援連絡会議の代表として東奔西走。ネクタイ姿よりGパンが仕事着のこのごろ。

職員 藤野 バザー盛上げの新しい装備として導入の綿菓子機を使いこなせず、珍味・カワイ綿菓子を製作。神戸の新名物に。

職員 小松 芦屋のバザーの売り子にインド土産にもらった民族衣装で登場。世間を騒がす某宗教関係者風で人目を引く。

職員 吉岡 フィリピンへ出張。ネグロスとルソンをまわり、強い日射しに腕がブルムケ水膨れ。繊細なところを示す。

職員 渡辺 アパートが地震で壊れお引っ越し。新居と職場はスクーターで通う。次はスクーターが寿命で潰れ、モノ入りのこのごろ。

神戸元町、南京町で行われた神戸五月まつりに、ボランティア山田晃三さんが仲間たちと本場仕込みの京劇を披露。南京町がより中国らしく。

この春大学を卒業したA君、その後どうするのかと思っていたら研修生もお世話になる丹南町の農家に弟子入り。同じくこの春卒業のTさんは夏からインドに勉強に。いろんな将来、楽しみです。

独自の活動として、被災地の子どもを対象とした農業体験プログラムを5月から行っています。いつも海外からの農業研修生がお世話になる兵庫県下の農家の協力を得て、子どもたちにリフレッシュの機会を提供しています。また盛り上がったボランティアの気運を定着させることを願った連続セミナーも神戸で行っています。

夏の研修生来日以降も、可能な範囲でPHDの特徴を生かした支援活動は継続していきたいと思ひます。なお、皆様にお願ひしておりました震災復興募金は6月末をもって終了とさせていただきます。ご支援ありがとうございました。



## 編集後記

あの震災からもうすぐ5カ月がたとうとしています。4月1日にJRが再開してから2カ月余り。6月12日からは阪急が、26日からは阪神が再開することになりました。当初いわれていたより2カ月も早く再開されることになり、驚くと同時にうれしさでいっぱいです。神戸のまちが少しずつ復興しているのですから。

先日、救援活動をされている人と話をする機会がありました。いまだに避難所

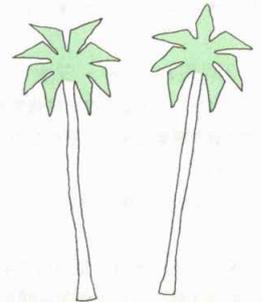
やテントでの生活をしている人がいること、家が全半壊したお年寄りが仮設住宅に移ることの大変さ等の話を聞きました。神戸にいながら震災から遠ざかっていたことに気づき、また、震災後今まで、何かしたい、しようと思いつきながら、ほとんど何もしていない自分が恥ずかしくなりました。しかし、その人から「できる人がしたらいい」という言葉を聞き、少しホッとしました。被災者ではない私が被災した人たちや救援活動をしている人たちの苦勞を知ることはできませんが、そういう人たちがいるということを忘れないでおこうと思います。

体験、経験してみないと分からないと

というのはレターの編集も同じです。今回初めて編集に関わり、作る側のしんどさとともに、楽しさを知りました。出来上がりはいかがでしょうか？

(S)

〈編集メンバー〉 柿原登志夫、国生 淳平、児島 章一、  
篠原 登子、宮田 早夏、吉田有紀子



新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載しておりません。